土木屋の読書と旅（19）

令和５年３月

コロナ禍が沈静化しつつある中で、いまだに armchair traveler（気取っていえば旅行記などを読んだり、旅行した人の話を聞いたりして楽しむ書斎の旅人）状態を抜け出せていない。今回はロシア文学の世界的な名作といわれる小説の舞台となった都市を、グーグルマップを使って探訪してみたい。その小説とはドストエフスキーの『罪と罰』、小説の舞台となった都市はサンクトペテルブルクである。もちろん『罪と罰』を読み終えることが前提の話ではある。

＊　＊　＊

いささか唐突なテーマ設定ではあるが、なぜドストエフスキーの『罪と罰』を対象とするのかについては多少の説明が必要であろうと思う。話は元日の新聞に掲載された新春詠のひとつ、俵万智のつぎの短歌に始まる。

人生は長いひとつの連作であとがきはまだ書かないでおく

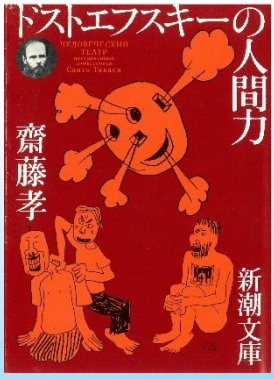
俵万智の短歌には日常づかいの言葉で凝縮された人の心のあり様が見事に切り取られており、その表現方法にいつもドキッとさせられることが多いが、この新春短歌には自身の中学時代の忸怩たる読書体験の記憶を呼び起こされた。中学時代に読書好きの友達と図書室にある本を競うように読みまくる時期があり、ドストエフスキーの『罪と罰』にも果敢に挑戦したが、文字でべったり埋まったページを数枚めくっただけでギブアップした苦い記憶が甦る。『論語』はいう「六十歳になると、人の言うことがなんでも素直に理解できるようになった。七十歳になると、自分がしたいと思うことをそのままやっても、人の道を踏み外すことが無くなった」と。来年には古希を迎えようとする私ではあるが、多少大げさに言うと、長き人生のあとがきにドストエフスキーを加えるのも乙なものになるのではないかと思えた。これがテーマ設定の理由である。“どんど焼き”の頃、この２月末で閉店するという町の本屋で、さっそく『罪と罰 1～3』（亀山郁夫訳/光文社古典新訳文庫）を買ってしまった。

＊　＊　＊

今回は 55 年前(昭和 40 年代前半)の自分と同じ轍を踏むわけにはいかないので、まずは挫折しないための準備が必要と思い、関連本を読んでみた。何といってもドストエフスキー作品ではある。近年、亀山郁夫・訳の『カラーマーゾフの兄弟』等が古典文学作品としては珍しくベストセラーとなったこともあり、一般読者向けの関連書籍は市立図書館でもたやすく見つけることができる。気分はだんだんと困難を乗り越え目的を達成する NHK 名作ドキュメンタリー「プロジェクト X」の乗りになってきた。

事前に読んでおくと読む気にさせてくれる本は何か、私なりの結論を述べよう。初読者がドストエフスキー作品を挫折なく最後までを読み終えるために事前に読んでおくと大いに参考になるお薦めの図書は、斎藤孝の『ドストエフスキーの人間力(新潮文庫)』である。斎藤はまえがきでつぎのようにいう。

『…人間のエネルギーは、一人で勝手に出てくるものではない。うまく受け止めてくれる相手がいることで次々に噴出してくる、そういう性質のものだ。「出る杭は打たれる」とか「過ぎたるはなほ及ばざるがごとし」といった思想が日本的であるとは限らない。ホンダやソニーをはじめ、「プロジェクト X」

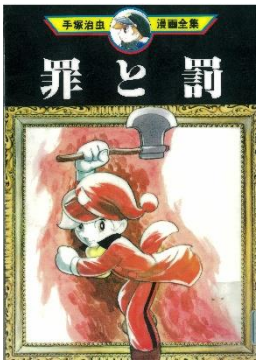


土木屋の読書と旅（19）

令和５年３月

的な人たちは皆、過剰な人たちだ。……現代日本に何よりいま必要なのは、人間理解力だ。人間としての面白さをお互い味わいあい、ひき出し合う関係が、個性的な人間を生み出していく原動力になる。そのためにも、まずは「過剰な人」の味わい方の練習から始めたい。…』と。

目次をみると、まえがき＝ドストエフスキーの人間力―過剰のすすめ、第１章＝『罪と罰』①過剰に「卑屈」なマルメラードフ、②過剰に「不意」なラスコーリニコフ、③過剰に「同情」的なソーニァ、④過剰に存在感をまきちらす端役たち、以降全ての章が“過剰に”を冠にした節で構成されている。



手塚治虫には『火の鳥』シリーズのように素晴らしい作品もあるが、漫画『罪と罰』は時代も古く(昭和 28 年発行)、作者の思い入れの強さが災いしたのか内容がかなり省略・改変・再構築されており、ドストエフスキー作品の理解には参考にはならないと思う。

『罪と罰』は六部＋エピローグで構成される小説であるが、そのあらすじは後続の読者のためにもあえて言わないでおく。新訳は正確さを記すための翻訳調の文体ではなく、露文学者うちでは一部誤訳の指摘もあるようであるが、読みやすい文体になっており一般人でもドストエフスキーが楽しめれば、これはこれでよいのではと思う。はじめての人でも第１部の 3/4 あたりまで読み進むことができれば、後は俄然と面白くなる。警察署での予審判事ポルフィーリーと主人公ラスコーリニコフの激しい論戦や心理戦は刑事コロンボと犯人との心理的駆け引きのドラマを見ているような感覚となる。ただし、ロシア人の名前は一度には覚えられず文庫本の栞になった主要登場人物表の助けを借りることになる。

＊ロシア人の名前＊光文社古典新訳文庫の読書ガイド（亀山郁夫）より

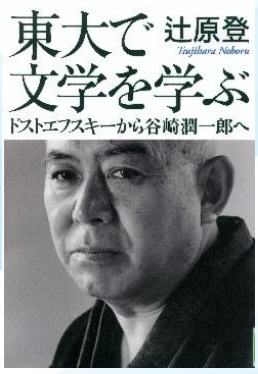
ロージオーン・ロマーノヴィチ・ラスコーリニコフ（主人公）：

名前はロージオーン、父称はロマーノヴィチ、姓はラスコーリニコフ、愛称はロージャ

ただし、小説で使われるのはロージャとラスコーリニコフであるがすぐに誰が誰かを忘れてしまう。

その他の本は参考までに２、３紹介するが、パラパラめくった程度であり、『罪と罰』読後に自分の読み方を検証するための本であると思う。『罪と罰』を読み進めるための力にはならない。

←中学時代に挫折した世界文学全集（米川正夫訳）河出書房 S41



『罪と罰』が執筆されたのが 1965 年ごろ、日本は幕末の動乱期で新選組の池田屋事件が 1864 年、坂本龍馬が寺田屋で襲撃されたのが 1866 年(「『罪と罰』を読まない」より)。この時代に、現代でも通用する文体、テーマで傑作を書いたフョードル・ドストエフスキーには脱帽するしかない。

土木屋の読書と旅（19）

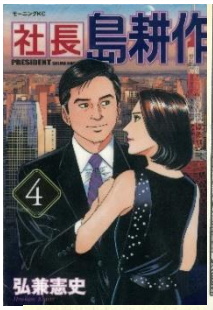
令和５年３月

＊　＊　＊

そもそもサンクトペテルブルクとはどのような都市（まち）なのか。ピョートル大帝の時代からロシアの首都だった都市であり、1922 年以降に首都となったモスクワとの対比で説明されることが多い。

前回のコラムでも紹介したが、小泉悠の『ロシア点描（PHP）』では彼がロシアで暮らした経験から得たロシアの都市を理解するための“空気感”やコメントを次のように示してくれている。

『モスクワはときに「大きな田舎」といわれ、大都市だけれどもどこかガサツなイメージを持たれています。首都であり、人口も最も多いので、生き馬の目を抜くような、どこか殺伐としたところがあるのです。一方、サンクトペテルブルクは古くからロシア帝国の中心地で、洗練されたムードが漂っています。街並みも違うし、住民の意識も違います。そんな違いが警察官にも表れているのでしょう。ちなみにモスクワの地下鉄は扉がギロチンのように「バシーン！」と閉まるので、初めて乗った人などはおびえてしまいますが、サンクトペテルブルクでは日本と同様、「プシュ」とゆっくり締まります。この地下鉄の閉まり方には両都市の気質の違いがよく表れているということもよくいわれます』



＊　＊　＊

『罪と罰』の舞台となったサンクトペテルブルクをストリートビューしよう。

まずは、島耕作が降り立ったモスクワ駅から出発する。

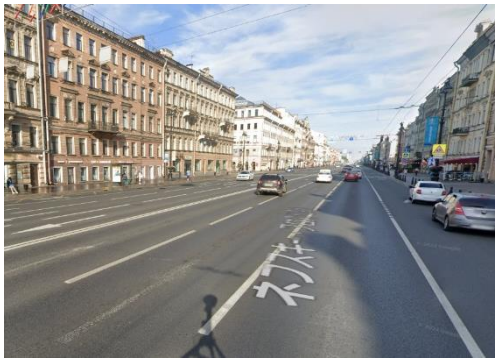
＊ロシアの駅は終着地の都市名で示される。コミックのストーリーでは島耕作はモスクワから個室寝台列車でサンクトベテルブルク駅についたことになる。

＊さすがに『社長島耕作』では駅屋上の駅名表示板も含めて極めて正確に描写されているのが分かる。

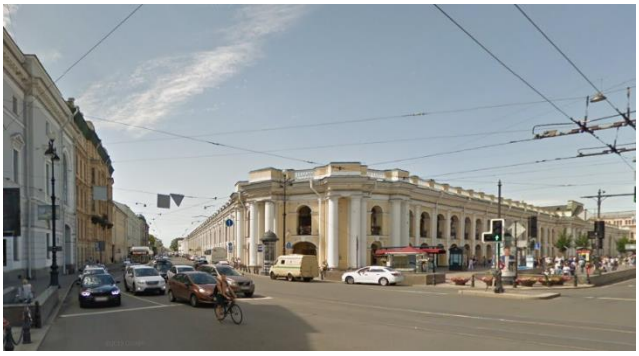
土木屋の読書と旅（19）

令和５年３月

　では『罪と罰』の舞台となる地区へのストリートビューを始める。
①駅前から西北西に延びるネフスキー大通りを進み、220 年余りの歴史を持つショッピングセンターである＜ガスチーニイ・ドゥヴォール＞の角をサドヴァ通りへ左折する。



■ ネフスキー大通り



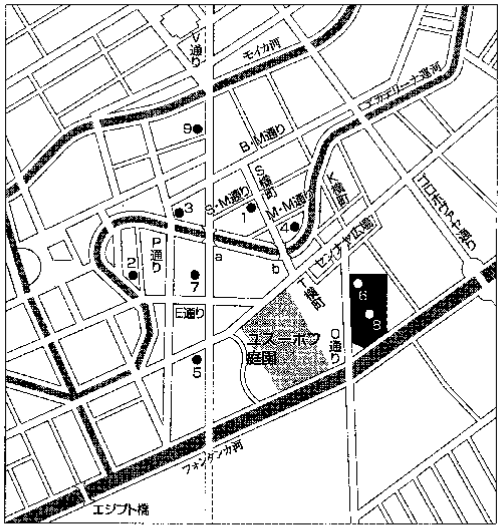
■ ガスチーニイ・ドゥヴォール前交差点

②このサドヴァ通りを直進すると第６部小説のクライマックスとなる舞台、センナヤ広場に至る。

■ センナヤ広場

　ソーニャから糸杉の十字架もらったラスコーリニコフ（罪を犯した主人公）は、センナヤ広場の地面に口づけし、自首するために警察署へ向かう。
　＊②以降の位置関係は、右図を参照してください。
③このセンナヤ広場の西端の交差点から、T 横丁の交差点を北に進むとエカテリーナ運河を渡って S 横丁、主人公ラスコーリニコフの下宿に至る。

センナヤ広場付近の地図



1　ラスコーリニコフの下宿
2　金貸しの老女の家
3　ソーニャの家
4　警察署
5　水晶宮（パレ・ド・クリスタル）
6　料亭
7　パカレーエフの建物
8　ヴァーゼムスキイ館
9　盗品の隠し場所
a　V橋（ヴォズネセンスキー橋）
b　K橋（コクーシキン橋）

■ T 横丁交差点

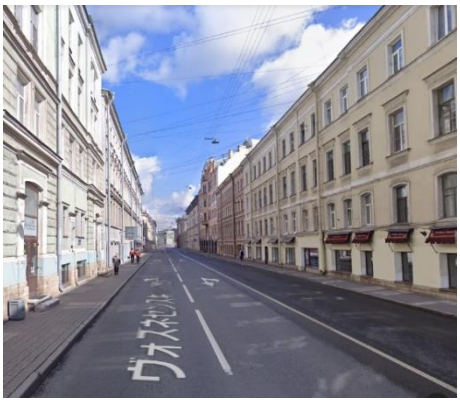
■ エカテリーナ運河とＳ横丁入口

土木屋の読書と旅（19）

令和５年３月

■ ラスコーリニコフの下宿

交差点の角にいる人は観光客と推察。この角にドフトエフスキーのプレートが刻まれているためであろう。



■ Ｖ通り

④ラスコーリニコフがＶ通りを渡って金貸し老女の家へ行った街路をたどる。

ラスコーリニコフの下宿と老女の家はどれくらい離れているのか。ドフトエフスキーの距離表現は独特である。『距離はいくらもなかった。家の門から何歩かということも知っていた。ちょうど七百三十歩だった（亀山郁夫・訳）』この表現は小説の他箇所にも存在する。

ストリートビューでみるサンクトペテルブルクはヨーロッパ的な美しい古都である。『罪と罰』が書かれた時代1865年頃の雰囲気は想像しがたい。

■金貸し老女の家付近

亀山郁夫は『NHK集中講義ドスエフスキー』でつぎのように述べている。

『ドストエフスキーが「地球上で最も現実離れした都市」「もっとも抽象的で架空の街」と呼んだペテルブルクは、十八世紀のはじめ、ネルヴァ川の河口、フィンランド湾の沼沢地にピョートル大帝が建設した人工都市です…都市全体が、いわば箱舟のような浮遊感覚の中で息をしていました。「ペテルブルク、空なるべし」という呪いの言葉が、この街の未来に不吉な影を落としていました。…一八六一年、急速に近代化を進め…仕事を、お金を、快楽を、そして自由を求めて多くの人が首都ペテルブルクに流れ着きました…犯罪が爆発的に増加し、火災も頻発し始めます』

＊　＊　＊

2月27日NHKテレビ番組『プロフェッショナル：仕事の流儀』のゲストは俵万智。還暦を迎えようとしている（昨年12月末）彼女が言った言葉“いま人生の中でどういう立ち位置にいるのか知りたい”に思わず引き寄せられた。かろうじて書きとめた彼女の言葉や短歌はつぎの三つ。

▶平凡な日常は油断ならない

▶言葉から言葉つむがず　テーブルにアボガドの種　芽吹くのを待つ

▶仕事の流儀：定番の問い「プロフェッショナルとは？」に対する返答

むちゃ夢中　とことん納得　どこまでも努力できれば　プロフェッショナル

これは『耳順』の世代から『而立』『不惑』の世代へのメッセージであると私は感じた。

古谷　健